

くつ かけ よし ひこ  
沓 掛 良 彦

学位の種類 文学博士  
学位記番号 文第62号  
学位授与年月日 平成2年10月25日  
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 サッフォー・詩と生涯

論文審査委員

(主査)

教授 岩田 靖夫 教授 中村 志朗

教授 鈴木 善三

論文内容の要旨

本論文『サッフォー・詩と生涯』は、紀元前六世紀のレスボス島出身のギリシアの女流詩人サッフォーの作品の翻訳、その註解、ほとんどが闇に包まれているその伝記的側面の探求と記述、ヨーロッパ文学におけるサッフォー伝説の跡づけ、作品の成立過程と研究史、作品論、わが国におけるサッフォー受容に関する比較文学的考察などを通じて、詩人サッフォーの全体像を描き出そうとする試みである。

わが国における西洋古典学研究は、戦前の揺籃期を脱して戦後にわかに活発となり、目覚ましい進歩を示しているかに思われる。文学の分野においても、ギリシア悲劇研究やホメーロス、ヘーシオドス研究などにおいて、きわめて学問的水準の高い、注目すべき研究の成果が生れつつある。その中であって、ギリシア抒情詩研究の分野が最も遅れており、また等閑に付されているという事実がある。これはひとつには、古代ギリシア抒情詩は、作品の大半が散佚したり湮滅したりしており、テキストの復元や解読に関して、研究上特別な困難を伴う、という事情も作用しているものと思われる。

古代抒情詩詩人としては随一の存在であり、「十番目の詩女神」と呼ばれ、ホメーロスに匹敵するとさえ見なされていたサッフォーに関しても事情は同様であって、これまでのところ若干の作品

の翻訳があるほか、研究論文の類いもほとんどないという状態にあった。本論文の執筆者は、古代ギリシア抒情詩を主要な研究対象としているが、その中でも最も重要な詩人であるサッフォーをとりあげ、さまざまな角度から研究してきた。その結果をまとめ、欧米の先学諸家の研究を吸収消化した上で、論者自身の解釈、見解を盛り込んで、詩人としてのサッフォーの全体像を描き出すことにつとめた。

## 論文の構成

本論文は、大別して二つの部分すなわち第一部「サッフォー詩集」、第二部「サッフォーの生涯と作品」とから成る。全体の構成、章立ては、左に掲げる目次の通りである。

「サッフォー詩集」は、『ギリシア詞華集』所収の詩人たちによるサッフォーへの頌詩十篇を含む。

### 目次

|                   |     |
|-------------------|-----|
| まえがき              | iv  |
| サッフォー詩集           | 5   |
| サッフォー頌『ギリシア詞華集』より | 103 |
| テキスト・出典・略註・略解     | 119 |
| サッフォーの生涯と作品       | 189 |
| 参考文献              | 467 |

## 第一部「サッフォー詩集」

古代ギリシアの抒情詩は、ピンダロスの4大祝勝歌やヘレニズム時代の詩人テオクリトスの田園詩がほぼ完全な形で残っている例を除けば、その殆どが散佚湮滅し、古代作家の引用やエジプトから出土したパピルスに記されたものが、断片として伝えられているにすぎない。紀元前六世紀のレスボス島出身の女流詩人サッフォーの作品もその例外ではなく、全部で九巻あったと伝えられる詩作品のうち、完全な形で残っているものはハリカルナッソスのディオニューシオスの引用によって伝えられた「アフロディーテー祷歌」（本書作品番号五番）一篇にすぎず、他はすべて断片である。現在われわれの手にし得るサッフォー詩作品のテキストは、2つの系統から発している。そのひとつは専ら古代の詩人や作家、文法学者などの引用したサッフォーの詩句を、18世紀のドイツ古典学者ヴォルフをはじめとする近代の学者たちが、蒐集編纂したものである。他は19世紀末にエジプトのオクシュリンコスで出土した「オクシュリンコス・パピルス」に記されていた断片である。イギリスの古典学者エドモンズに始まる古典学者たちが、「オクシュリンコス・パピルス」に記されていた断片を解読復元し、古代作家の引用による断片と合せて一体としたのが、現在われわれの接するサッフォーの作品である。従って、現存するサッフォーの作品は、そのテキストの校訂者によつ

て読みや復元の度合いが異なり、作品解釈の上でも、これを翻訳する上でもさまざまな問題が生ずる。

本論文におけるサッフォールの作品翻訳に当たっては、下記の十種のテキストを用いて、それらを批判的に扱い、校合比較した上で、各テキストの中から最も妥当と思われる読みを採って訳出した。

- 1 E.-M. Voigt, Sappho et Alcaeus, Fragmenta, Atheneum-Polak and van Gennepe, Amsterdam, 1971 (V)
- 2 E. Lobel et D. Page, Poetarum Lesbiorum Fragmenta, Oxford, 1968 (LP)
- 3 M. Treu, Sappho Lieder, Ernst Heimeran Verlag, Munehen, 1968 (T)
- 4 D. Page, Sappho and Alcaeus, Oxford, 1965 (P)
- 5 Th. Reinach et A. Puech, Alcée-Sapho, Coll. Budé, 1966 (R)
- 6 E. Lobel, Sapphous Mele, Oxford, 1925 (L)
- 7 D. Campbell, Greek Lyric I, Loeb Classical Library, Harvard, 1982 (C)
- 8 C. Gallavotti, Saffo e Alceo, Testimoniazione e Frammenti, Libreria Scientifica Editrice, Napoli, (Date unknown) (G)
- 9 S. Kakisi, Ta Poiemata, Kerdos, Athene, 1979 (K)
- 10 J. M. Edmonds, Lyra Graeca, Loeb Classical Library, Harvard, 1963 (E)

サッフォール作の114番、115番の2篇は左のテキストから訳出した。W. R. Paton, The Greek Anthology, Loeb Classical Library, Harvard, 1962

現在われわれの手にし得るサッフォールのテキストとしては最良のものであり、学問的な水準から見て最も厳密な校訂がなされているE・M・フォイクトによるテキストには、全部で213の断片を収めているが、ここでは原テキスト（パピルス）の破損がひどく解説、訳出が不可能なもの、単語程度しか残っておらず、訳出しても意味をなさないものを除いて、113篇を訳出し、他に『ギリシア詞華集』に収める伝サッフォール作の2篇（作品番号114番、115番）を加えて「サッフォール詩集」とした。合せて、これも『ギリシア詞華集』に収めるサッフォールを歌ったエピグラム十編を「サッフォール頌」として添えた。

「サッフォール詩集」における作品の配列の仕方は、沓掛独自の考えによるものであって、先に掲げたテキストの編者たちのそれには従ってはいない。

この「サッフォール詩集」には、「テキスト・出典・略註・略解」を付した。テキストは訳詩のひとつひとつが、どのテキストの読みにしたがってなされたかを示す。「出典」ではそれぞれの作品（断片）がどのような古代作家によっていかなる形で伝えられたものか、あるいはどのパピルスから起こされたものかについて略記する。

さらに右の「略註・略解」では、訳出したサッフォールの作品ひとつひとつについて、テキストの

解説や読みの問題、テキスト復元に関する文献学的な問題を指摘する。あわせて主要な作品については、その詩形、韻律などの問題にも触れ、それぞれの作品（断片）が、従来先学諸家によってどのように解釈されてきたかということ述べてそれらを紹介し、また時に批判を加えて訳者自身の解釈をも示した。テキストのほとんどが著しく破損したり、不完全な断片であるサッフォールの作品のような場合には、詩の翻訳は、テキストの復元解説の作業、テキスト批判の作業を踏んでおこなわれる。従って翻訳自体がすでに作品解釈だと言えるが、ここではそれに註解を付して、作品の内容や特質を一層明らかにしようと試みた。この部分は、従来のサッフォール研究の成果を踏まえた、個々の作品解題であると同時に、本論文の執筆者による独自の作品解釈をも含んでおり、本論全体としてはかなり大きな比重を占めるものである。

## 第二部 サッフォールの生涯と作品

第二部は、サッフォールの伝記的事実の探求、作品が生れる背景となったレスボスの社会における女性たちの生き方、いわゆる「サッフォール問題」の解明、サッフォール伝説の発展の過程の追跡と分析、作品の成立とその享受、受容のされ方、歴史の中における作品の運命などを扱い、また「美とエロースの園」と題する章で、サッフォールの詩的世界の特質を明らかにする。さらにはサッフォールの作品を翻訳する上での諸問題を検討し、最後に付論という形で、わが国におけるサッフォール受容に関する、比較文学的考察をおこなう。その内容は左記のような章立てとなっている。

- 第一章 伝説の中に生きる詩人
- 第二章 詩女神の島レスボス
- 第三章 時代背景と環境
- 第四章 出自・家庭環境・詩人の容姿など
- 第五章 「詩女神の侍女たちの館」—— サッフォールと少女たち
- 第六章 「サッフォール問題」あるいは「レスビアニスム」
- 第七章 悲恋伝説—— レウカスの巖よりの投身？
- 第八章 サッフォールとアルカイオス
- 第九章 文学の中に生きるサッフォール
- 第十章 作品の運命—— テキストの成立、埋滅、復活の経緯など
- 第十一章 美とエロースの苑—— サッフォールの詩的世界
- 第十二章 伝え得ぬもの—— サッフォールの詩の翻訳について

付

わが国におけるサッフォール—— 上田 敏、日夏耿之介、呉 茂一の訳業について

## 第二部各章内容要約。

以下、本論文の第二部で述べ、また論じたところを、各章ごとにその内容を要約して示す。

### 第一章 伝説の中に生きる詩人

本章は第二部の総論にあたり、サッフォ어의伝記的記述をおこなうことの困難さを説き、論者がその方面において、いかなる心構えによってそれを試みようとするか、ということ述べる。

元前六世紀のレスボスの女流詩人サッフォerは、同時代の朋輩の詩人アルカイオスによって、在世中に早くも女神に擬せられ、プラトーンによっても「十番目の詩女神」と呼ばれて称えられたほどその詩名は高かった。それにもかかわらず、この名高い女流詩人の生涯に関しては、あまりにわずかなことしか知られてはいない。ストラポーンが「驚嘆すべきもの」と呼んだ詩人サッフォerは、在世中から20世紀に至るまで、絶えず身近に伝説を生み出し続けてきた特異な存在であり、まさに「伝説の中に生きる詩人」であった。それゆえこの詩人の伝記的側面を探り、2600年近い昔に生きた一女性の姿を、正確に描き出そうとするならば、まず幾重も積み重ねられてきた神話や伝説を引き剥がすことから始めねばならない。その上で、伝説の中から虚像と実像とを腑分けし、その作業を通じて詩人の姿を浮かび上らせねばならない。これはきわめて困難な仕事である。

本研究では、欧米の先学諸家によるサッフォer研究の成果を踏まえた上で、また論者自身のサッフォerの作品解釈を通じて、「伝説の中に生きる詩人」サッフォerの実像を探り、ひとつのサッフォer像を描いてみたい。

### 第二章 詩女神の島レスボス

本章ではサッフォerの詩をはぐくんだ、レスボス島の気風、そこに栄えたアイオリス文化の特異な点について述べる。

サッフォerはレスボス島のミュティレーネーに生れ、その全生涯をこの島で送った詩人である。このことは詩人サッフォerについて語る時、きわめて大きな意義もっている。ギリシア抒情詩の揺籃の地であるこの島は、豪華と華麗とをもって鳴ったリューディア文明の影響下にあり、アイオリス人の文化の中心地として、きわめてオリエント的色彩の濃厚な文化が栄えていた。この地には、ギリシアの文化としては異例なほど豊かな官能性と豪華華麗を喜ぶ気風が醸成されていた。このようなレスボスの気風が、サッフォerの詩を生み、これをはぐくんだのであった。またこの島は風光明媚で女性たちの美しさによっても名高かった。サッフォerが自然の美に鋭敏に感応し、少女たちの美しさを称える作品を生んだのも、このような風土気風が背景となったものと思われる。

### 第三章 時代背景と環境

本章では、サッフォerが詩的活動を展開した前6世紀のレスボスの政治的、文化的状況を描く。

同時代にレスボスに生き、政治的抗争の渦中に身を投じた詩人アルカイオスほどではないとはいえ、サッポォーの生涯にも、当時のミュティレーネーの政治状況や社会情勢は大きく影響し、それは彼女の詩にも反映している。この詩人が生きた当時のレスボスの主都ミュティレーネーは政争と内紛に明け暮れており、サッポォーもそれに巻き込まれて、2度にわたるシケリア流謫の憂き目を見た。

詩人サッポォーの形成とその詩的活動を考える上で重要なのは、レスボスの文化的環境である。レスボスにおいては、女性の社会的地位が極度に低かったギリシア本土やイオーニア地方とは異なり、女性たちは教養を積み活発な文化活動を繰り広げて、一種のカウンター・カルチャーを形成していた。その特殊な状況こそが、「女人の世界」であるサッポォーの詩をはぐくんだ母胎となったのである。

#### 第四章 出自・家庭環境・詩人の容姿など

本章では、TESTIMONIA とよびならわされている古人のサッポォーへの言及、オクシュリニコス出土のパピルスなどから、サッポォーの伝記的事実を割りだそうとの試みである。

古代においては、サッポォーについていくつかの書物が書かれたらしいが、それらは書名のみ伝わっており、すべて散佚湮滅した。それゆえ、この詩人についての確実な資料がほとんどなく、その伝記的側面を再現し、記述することははなはだ困難である。サッポォーにまつわる伝説を出来るかぎり排除し、その伝記的な側面を輪郭なりとも探るためには、オクシュリニコス出土の伝記的記述を含むパピルスをはじめ、大理石に刻まれた「パロス島年代記」、TESTIMONIA に見られる、この詩への古人の言及を綿密に検討してそこから伝記的事実を組み立て、それにサッポォー自身の作品から自伝的要素を抽出して、その周辺に関する状況を記述する他はない。ここでは、数少ない資料を批判的に扱い、サッポォーの出自や、彼女を取り巻いていた環境を描き出すことにつとめ、また古来問題とされているサッポォー醜女説にも触れて、その検討を試みた。

#### 第五章 「詩女神の侍女たちの館」——サッポォーと少女たち

本章では、サッポォーの詩を解く上でのひとつの重要な鍵であり、その作品解釈においても重要な意味を担っている、サッポォーと彼女を取り巻く少女たちとの関係を考察する。

「女人の世界」に生きる詩人であり、少女たちへの愛を歌って詩名の高かったサッポォーが、彼女が「ヘタイライ」（仲間たち）あるいは「パルテノイ」（処女たち）「コライ」（娘たち）と呼んでいる少女たちの集団を、その周辺に持っていたことは確実である。詩人とこの集団との関係はいかなるものであったのかという問題は、サッポォーの詩を解く大きな鍵である。サッポォーの詩の根本的理解に関わるこの問題は、次章で論ずる「サッポォー問題」とともに、今なおこの詩人を研究する上での最も難しい問題とされており、前世紀末以来、この問題の実相を見極めようとして、学者たちがかまびすしく論争を繰り広げてきた。

ここでは、この問題をめぐってこれまで展開されてきた先学諸家の諸説を取り上げて検討批判し、ことにも有力な説であったサッフォー「ティアソス（宗教結社）主催者」説を否定し、この詩人をコロディダスカロス（コロスの長）と規定したC・カラムの所説を延長して考え、それを修正したところにこそ、両者の関係が正しくとらえられる視点が生れる、との論者自身の見解を提示する。

## 第六章 「サッフォー問題」あるいは「レスビアニスム」

本章では、サッフォー研究者の間で「サッフォー問題」と呼ばれている、サッフォーにおける同性愛の問題を扱い、その実態がいかなるものであったかということ、作品に即してできるかぎり客観的にその解明を試みる。

「サッフイニスム」などとも言われ、詩人サッフォーの名と分かちがたく結びついている同性愛の問題はサッフォー研究者の間では「サッフォー問題」Sapphophage と呼ばれており、今世紀初頭以来さまざまな解釈がおこなわれており諸説紛々の状態である。サッフォーの作品の本質とも関わるこのデリケートな問題に関しては、未だにその真相、実態を明らかにした定説はない。この問題はきわめて陰微であり、これを論ずる者は、おのずと主観に染めあげられるからである。

ここではまず古代ギリシアにおける同性愛一般に関する観念に触れた後、先学の代表的な見解をいくつか整理検討し、詩人の作品とも照らし合せて、サッフォーにおける同性愛の存在を肯定しつつも、それが性愛というよりは、むしろ詩人と少女たちとの精神的な結びつきを主とした関係だったろうと推定する自説を述べる。

## 第七章 悲恋伝説——レウカスの巖よりの投身？

「伝説の中に生きる詩人」であるサッフォーは、すでに在世中からさまざまな伝説につつまれていた存在であり、このサッフォー伝説は、彼女を女神に擬した、同時代のレスボスの詩人アルカイオスによって早くも生みだされている。この詩人にまつわる最大の伝説は、美青年ファオンへの悲恋と、それゆえのレウカスの巖からの投身伝説である。古くはオウイディウスによって歌われ、近代ではボードレルの「レスボス」によって歌われることによって名高いこの悲恋投身伝説は、サッフォーの伝記的記述の中に深く食い込んでおり、もはや引き剥がすことさえ困難になっている。

本章では、アッティカ中・新喜劇に始まるものと見られるこの伝説を、その発生の時点から探り、ことにもこの伝説形成の上で決定的に大きな役割を演じた、オウイディウスの書簡体の詩「サッフォーからファオンへの手紙」に焦点を当てる。そしてこの作品を綿密に分析した上で、詩人自身の作品と照らし合せて、「女人の世界」を詩の領域とするサッフォーにとって、美青年への悲恋とそれゆえのレウカスからの投身が、全くの文学的虚構にすぎないことを明らかにした。

## 第八章 サッフォーとアルカイオス

サッフォーとアルカイオスは、詩神の島レスボスの生んだアイオリス文化の二つの精華である。

同時代に同郷の詩人として活躍したこの両詩人の間には、なんらかの密接な関係があったものと想像されるが、それを証拠立てる資料が存在しないため、具体的なことは分らず、憶測するほかはない。両者は詩人としての資質も異なり、政治詩や飲酒詩を本領とするアルカイオスと、恋に生きることを身上とするサッフォーとは、詩的活動に限って言えば、相交わるころは薄かったものと推定される。ここでは、両者の関係を暗示していると思われる唯一の作品である、「アルカイオスとサッフォーの対話」を取り上げ、その考察を通じて、両者の関係についてのひとつの仮説を提示した。すなわち、両詩人は相識の仲であり、アルカイオスにはサッフォーに対する畏敬の念と、彼女を鑽仰する心があったが、サッフォーのアルカイオスに対する態度は冷淡なものであった、との見解を示した。

## 第九章 文学の中に生きるサッフォー

本章は古代から現代に至るまでの、ヨーロッパ文学におけるサッフォー伝説の概観をおこなう。詩人サッフォーは、古代ギリシアから今世紀にいたるまで、常にその周辺に神話や伝説を生み出し続けてきた。そして、そのサッフォー伝説に最大の関心を寄せ、みずから伝説を生み出してきたのもまた詩人たちであった。従って「伝説の中に生きる詩人」サッフォーとは、その実「文学の中に生きる詩人」とほとんど同義である。ここでは、古代ギリシア以来、ヨーロッパの著名な詩人や作家たちが、かのレスポスの詩人をどのように描き、いかなるサッフォー像を作りあげてきたか、ということ概観し、サッフォー伝説の発生、形成の過程と、その後の発展を、具体的に作品に即して跡づける。

まずは同時代人アルカイオスの詩に見られるサッフォー擬神化から説き始め、アッティカ新喜劇、『ギリシア詞華集』、ラテン詩文学におけるサッフォー像を探る。さらにルネサンス以降のヨーロッパ文学（イタリア、スペイン、フランス、イギリス、ドイツ、ロシアの文学）において、どのようなサッフォー像が、詩人や作家たちの手で生み出されてきたかを、作品の要点を紹介しつつ眺め、ヨーロッパ文学におけるサッフォー伝説の変遷を通観する。

## 第十章 作品の運命—— テクストの成立、埋滅、復活の経緯など

サッフォーの作品は、多くは散佚湮滅した古代詩人の作品の中でも、きわめて特異な経緯をへて現代に伝えられた、というよりは奇跡的な形でその一部分が蘇ったものである。

本章では、文字使用によって、作者自身が書いたと思われるサッフォーの作品集が、どのようにして成立したのかという作品成立の過程をまず推定する。次いで、アレクサンドリア時代の2大文献学者アリストファネースならびにアリストアルコスによって、それぞれ別の九巻の作品集としてまとめられたことを述べ、その編纂の方法等に触れる。そして、その後ビザンツ時代に、教会の敵視によってサッフォーの作品が2度にわたる焚書に遭い、ほぼ完全に湮滅した経緯を説く。かくして一度は完全に失われたサッフォーの作品が、ルネサンスに入ってから、古典再発見とともにごく小

部分がかすかに復活した経緯に触れる。その後、18世紀のドイツの古典学者C・ヴォルフに始まる近代の文献学者たちの必死の断片蒐集の努力と、前世紀末におけるオクシュリンコス・パピルス出土によって、かのレスボスの詩人の作品が、全体からみればごく一部ではあるが再び蘇り、それによって sappho の詩の世界を窺うことができるようになったことを述べる。併せて、これら近代の古典文献者たちの手になる、代表的な sappho のテキストを、文献学的な見地から批評することをおこなった。

## 第十一章 美とエロースの苑—— sappho の詩的世界

本章は論者による sappho の作品論であり、この詩人の作品が何をテーマとし、どのような詩的特質を持っているのかということ、全体的に論じたものである。

ボードレールによって「恋する女にして詩人」と呼ばれ、リルケによって「愛の化身」とされた sappho は、エロースに憑かれた存在であり、エロースの領域である恋こそが、彼女の詩の最大のテーマであり、その中枢をなすものであった。「女人の世界」に生き、愛の女神アフロディーテを齎す sappho にとって恋こそがすべてであり、彼女の詩の大半は、同性である少女たちへの激しい恋情に沸き立っている。 sappho は恋愛詩のみならず、祝婚歌や神話伝説をテーマとした作品も残しているが、詩人としての本領は恋の詩にあり、白眉、絶唱と見なされている代表的な作品はすべて恋の詩である。

sappho にとって、恋とは何よりもまず *passio* すなわち激情であると同時に受苦としてとらえられていた。恋をそのようなものとして体験するこの詩人は、その熱烈な恋愛詩において、恋ゆえの苦悩、それもペトラルカの言う *voluptas dolendi* を歌ったのである。このような恋の詩人 sappho は、その作品を恋の苦悩を癒す浄化作用カタルシスを求めて書いたものと思われる。この激情を歌ってもなお、「みやび」をうしなわず透明な詩的世界を生み出し得たところに、詩人としての sappho の真骨丁が発揮されている。彼女はまた、祝婚歌においてもきわめて真摯な情感を盛りこんだ、個性豊かでみやびな作品を生みだしている。そのみか、 sappho は、古代ギリシアの詩人としては異例なほど自然界の美に鋭く反応し、それを作品の中に美しく結晶させている点も、強調するに足る詩的特質である。いずれにせよ、 sappho の作品はすべて「みやび」の精神に貫かれ、完璧な表現と相俟って、それが彼女の作品の詩的価値を著しく高め、それを不朽のものとしているのである。

## 第十二章 伝え得ぬもの—— sappho の詩の翻訳について

本章は sappho の詩の翻訳論である。言語芸術であり、言語表現そのものを生命とする詩一般の翻訳にとまらぬ困難な点をまず挙げ、その上で、ギリシア抒情詩が本来旋律をともなった歌謡であったということもあり、その性質上、極めて翻訳がむずかしいことを強調する。歌謡としての内容の単純さに加えて、一切の装飾を排し、簡浄の極みを尽くした言語表現をとったギリシア抒情詩

は、翻訳によってその持味を再現するのが、極度に困難である。就中サッフォアの詩こそは、まさにそのようなたぐいのギリシア詩の典型であって、その簡潔透明な詩的言語を駆使した詩風は、絶望的なまでに翻訳をもっては再現しがたいものである。この事実を、サッフォアの詩的言語やスタイルの特質を具体的に挙げて、明らかにする。最後に、「アフロディーテー祷歌」の最初の部分の phonic texture と、その部分の英仏伊独露語訳を掲げて、例証とした。

### 付 わが国におけるサッフォア——上田敏、日夏耿之介、呉茂一の 訳業について

付論として執筆された本章は、いわばわが国におけるサッフォアの受容史であり、また翻訳史でもあって比較文学的な内容を持つ。ここでは我が国の読者にサッフォアを翻訳、紹介した3人の人々すなわち上田敏、日夏耿之介、呉茂一の訳業を検討し、レスボスの詩人が、おぼろげながらわが国にもその姿を知られるに至った次第を追ってみた。

わが国の文学界に、詩人サッフォアの名とその作品を初めて知らしめたのは上田敏である。明治29年弱冠23歳の上田敏は「サッフォアの歌集」を著し、かのレスボスの詩女神の姿とその詩風とを、当時としてはきわめて正確に描き出した。その中にサッフォアの訳詩四篇が含まれており、これが本邦におけるサッフォア作品翻訳の高矢となった。フォートンの書を用いた敏の訳詩（祝婚歌の翻訳）は、多くは英訳に拠っているが、敏の詩才と詩的洞察力の深さによって、サッフォアの詩の美しさに驚くほどよく迫っている。ことにもその文学的香気の高さによって名訳と呼ぶに足る出来栄えとなっている。その後高踏派の詩人日夏耿之介も訳詩集『海表集』において、英訳に基いたサッフォアの訳詩十篇を発表し、わが国の読者にかのレスボスの詩人を紹介する労をとった。日夏の奔放な訳詩は、この詩人の作としては興味深いのが、原詩との乖離があまりに大きく、サッフォアの詩とは呼びがたいものであった。しかし日夏のような優れた詩人が、訳筆を振ってサッフォアの名をわが国の読者に知らしめた意義は大きく、その功は認めねばならない。

わが国の文学界にサッフォアの真価を知らしめたのは古典学者呉茂一である。わが国における西洋古典学の大先達であり、詩才ゆたかな学匠であるこの人物が、サッフォア作品25篇を訳出紹介することによって、わが国の読者は初めてサッフォアの詩の世界の一端を窺うことができるようになったのである。しかしその訳詩の数がわずか25篇にとどまったのは惜しむべきことであった。同氏が『ぎりしあの詩人たち』においてサッフォアの詩の美を説いた功績も、また注目すべきものである。

上記の3人を除くと、わが国でサッフォアに言及した文学者はまことに少ない。わずかに詩人萩原朔太郎が興味ある発言をしているのが眼を惹く程度であり、近年では詩人鷺巣繁男の注目すべき発言があるのみである。

遺憾ながら、サッフォアはわが国ではまだまだ知られざる詩人である。本論文は、その知られざる詩人サッフォアの全体像を描こうとつとめた、本邦最初の試みであり、同時に近年目覚ましい研

究の成果が見られない欧米のサッフォー研究に対する、東洋の古典学徒のひとつの挑戦でもある。

## 論文審査結果の要旨

プラトンによって詩女神にも擬せられたサッフォーは、その希有の詩才によりすでに在世中から神格化されていたが、それ以後も、二千数百年にわたり「サッフォー伝説」に包まれてきた。それは、後世のわれわれにとっては、とりわけサッフォーの作品の90パーセント以上が失われてしまったことにもよる。この詩人の作品は、アレクサンドレイア時代に厳密な校訂を経て全九巻の作品集として編纂されたのであるが、キリスト教支配下のビザンツ帝国において、恋愛をあつかったギリシアの詩人たちの作品が大量に焼き捨てられ、それとともにサッフォーの作品も二度にわたる焚書にあい、湮滅したのであった。

ヨーロッパにおけるサッフォーの詩の本格的な復元は、18世紀前半のドイツ古典文献学の研究に始まる。それは、一方では、古代の詩人、作家、文法学者たちの引用したサッフォーの詩句の零墨を収集編纂することであり、他方では、19世紀の末にエジプトのオクシュリンコスで出土したパピルスに記されていた断片を復元し解読することであった。その結果、現在では、学問的に極めて精度の高いサッフォーのテキストが次々に刊行されているが、当然のことながら、この種の研究は文献学の枠内に自らを限定する。

これに対して、サッフォーの伝記的研究および作品解釈は、古典学者ではない詩人、文人、学者などによることが多く、その結果、通俗的な書物やサッフォー訳詩集はヨーロッパ諸国で数多く刊行されたが、古典研究としては見るべきものが必ずしも多くはない。この方面の優れた研究は、20世紀になって、特に第二次大戦後に現われ始めたような状況である。

このように、文献学的研究と「文学」としてのサッフォーの享受とが乖離している状況において、文献学的研究に基づく訳詩と、サッフォー伝説を含むこの詩人の伝記的記述、さらには作品論をも収めたサッフォーに関する全体的な書物は、ヨーロッパにおいても殆ど刊行されていない。本論文の執筆者の意図するところは、このサッフォーの全体像を明らかにする点にある。言うまでもなく、わが国においては、サッフォーに関して、これまで研究らしい研究はなに一つ存在しなかった。すなわち、明治時代に上田敏が英訳からの重訳により『サッフォーの歌集』を著し、昭和に入って、日夏耿之介が同じく英訳に基づいて『海表集』のうちにサッフォーの訳詩を十編収録し、更に、呉茂一が『ギリシア抒情詩選』のうちにギリシア語原典から28編を訳出収録したのが、その殆どすべてである。これらの翻訳は、一流の詩人、古典学者によるそれぞれに個性の香り高い名訳であるが、前二者については原典からの隔たりが大きく、後者については紹介の範囲が狭い憾みがあった。このような状況において、本論文は、精密な文献学的研究に基づく主要な断片の訳出と注釈、また、サッフォーの生涯と作品に関する文学的研究の両面から、サッフォーの全貌を可能なかぎり明らか

にしようとした労作であり、世界的に見ても類書のあまりない特筆に値する業績であると言える。

本論文は大きく二部に分かたれる。第一部はサッポールの詩の断片の翻訳と注釈である。論者は、翻訳にあたり、現在学問的にもっとも精度が高いとされている E.M. フォイクトの "SAPPHO ET ALCAEUS" を底本とし、他に九種のテキストを用いて比較校合をおこない、各テキストの中から論者がもっとも妥当と判断した読みを採って訳出している。その判断の根拠については、それぞれの作品に関する論者独自の解釈をも含めて注釈の中で詳しい議論が展開されているが、この注釈はまた、論者が近年の欧米のサッポール研究にいかにか精通し、その成果を吸収しているか、をも示している。フォイクトのテキストには、全部で213の断片が収録されているが、論者は、原テキスト（パピルス）の破損がひどくて解読訳出が不可能なもの、単語程度の残存のため訳出しても無意味なものを除き、113篇を訳出している。また、作品の配列は、多くのテキストが失われた九巻本の想定されうる配列を復元しようとするのとは異なり、サッポールの詩的世界の全体が浮かび上がるように、テーマ別に、いわば文学的に配列されている。

ところで、本論文第十二章「伝え得ぬもの」で事例に即して詳しく説かれているように、サッポールの詩を翻訳することは、いずれの言語をもってしても極めて困難である。一般に古代ギリシアの抒情詩は装飾を嫌い、圧縮された簡素な表現を好むため、華麗な形容語を用いたがる近代語の翻訳によってその詩味を伝えることは極めて難しいと言われている。ことに、サッポールの詩は簡素の極みを尽くした言語表現により名高いものであり、更には、ギリシア語の中でも気音の消去とアクセントの位置により特有の音楽美を宿すアイオリス方言で書かれているため、その翻訳は不可能事とさえ言われてきた。このような事情を想い、また、ヨーロッパ語とは違って、ギリシア語とは言語構造の全く異なる日本語への翻訳という点を顧みるとき、論者の翻訳は驚くべき成功を収めている、と言いうるであろう。欧米の翻訳は、一方では、英独仏のテキストの対訳に多く見られるように、もっぱらギリシア語テキストの理解のために添えられた学問的な（すなわち、詩的完成度を第一義におかない）翻訳であるか、あるいは、自らの詩才を恃んでサッポールの原詩に対して自由に創作的態度で臨むかのいずれかであった。これに対して、論者の翻訳は、出来るかぎり文献学的に正確に原詩の意味の再現を狙いながら、同時に、サッポールの優美さ、ポエジーを現わそうと意図している。サッポールの原詩は、素朴な日常語の簡潔な配列から成り立っているが、おそらくはそれに習って、論者は擬古文を用いず韻律も使わずに、普通の日常的日本語でサッポールの澄明かつ優美な詩的言語の再現に努めたものと思われる。そして、この翻訳は、正確に、サッポールの歌う女性的な美と情熱の世界を伝えているのである。

本論文の第二部は、サッポールの生涯と作品に関する研究である。その希有の詩才により、古代においてすでに女神に擬せられていたサッポールは、生前から20世紀にいたるまで、絶えず身近に伝説を生み出し続けてきた特異な存在であった。それ故、この詩人の伝記的側面を可能なかぎり正確に描き出そうとすれば、諸説紛々たる伝説の中から虚像と実像を弁別しなければならない。その

際、判定の根拠となる究極の資料としては、僅かに残存するサッフォー自身の断片があるのみであり、これに加えて、古代の作家たちの諸作品に現われる TESTIMONIA（証言）をも、すでに伝説の影響を受けている証言もありうるという批判的考慮を加えながら、用いることができる。このような方法により、論者は第一章から第十二章まで、詩人の故郷レスボス島、時代的背景、家庭的环境、サッフォーと少女たち、同性愛問題、悲恋伝説、西洋文学におけるサッフォーの影響、などの諸問題について、多くの空想的な諸伝説を覆しつつ、客観的に語られうる限りの内容の復元に努めている。その中で、本論文の特色とも言うべき成果は、以下の諸点にあるかと思われる。

先ず第一は、論者がサッフォー伝説の中核とも言うべき悲恋伝説を否定している点である。この伝説は、サッフォーがファオンなる美青年に恋して拒絶され、絶望してレウカスの巖より身を投げた、というものであり、古くはオウィディウスにより、近くはボードレルによっても歌われているものであるが、論者はこの伝説の元となったと思われるオウィディウスの作品を綿密に分析して、その世界がサッフォーの詩の現わす世界と全く異質であることを明らかにして、この伝説の文学的虚構性を結論している。少なくとも、サッフォーの断片自体からわれわれが感じとりうる限りにおいては、この詩人の激しい恋は美しい同性への恋であり、アルカイオスへの冷淡な態度からも窺えるように決して異性への思慕ではなかったと思われるから、論者のこの結論は妥当である。

だが、そのような事情であれば、これほどに激しくも美しく恋を歌い続けたサッフォーの恋とは何であったのかが、当然問題になる。すなわち、レスビアニスムの問題である。この問題は Sapphfrage（サッフォー問題）と呼ばれ、研究者の間で様々に論じられてきたが、未だに定説がない。一方では、常識的の道徳に従ってサッフォーの清浄さを守ろうとする人々は、彼女は少女たちを集めて一種の高等教養学校を運営していたのであり、その恋は全く精神的なものであった、と解釈する。あるいは、サッフォーは、アフロディーテーを斎き祭る一種の宗教的集団の女祭司であり、彼女の周囲に群れ集う少女たちはその信徒である、という解釈もある。もちろん、他方では、サッフォーを正真正銘のいわゆる同性愛者であった、とする解釈もある。このような諸説を批判的に検討しながら、論者が下した結論は、サッフォーが広い意味において同性愛者であったことは疑うべくもないが、その同性愛はいわゆる性愛というよりは、詩と歌による美しきものの追求という絆により結び付けられた、詩人と少女たちとの精神的な関係であったであろう、というものである。断片の翻訳から見ると、論者は必ずしも性愛的関係を否定してはいないようであるが、かれらの結びつきの本質的な点は精神的なものであったという主張であり、この結論は妥当であろう。いずれにしても、明確な断定を下すことが本質的に不可能なこの問題において、論者の洞察は充分に行き届いたものである。

こうして、論者の提示するサッフォーとは、エロースに憑かれた存在であり、恋こそがこの詩人の中心的主題である。しかし、その恋は同性である少女たちへの恋であり、その世界は愛の女神アフロディーテーの祭りを中心に集う典雅にして優美な女人の世界であった。サッフォーの詩は激しい恋情に沸き立っているが、そこに示されているように、恋とは彼女にとって激情であると同時に

苦悩でもあった、と論者は言っている。恋をそのようなものとして体験するこの詩人は、ペトラルカの言う *voluptas dolendi*（苦悩の悦楽）を歌ったのである、と言う。そして、彼女の作品は、恋の苦悩を癒す *katharsis*（浄化作用）を求めて、書かれたものであろう、とも言う。いずれにしても、このような激情を歌ってもなお、その詩的世界は澄明であり、優美であり、典雅であるところに、サッフォーが希有の詩人であった所以もあるであろう。

その他、本論文には、西洋文学におけるサッフォー伝説の受容を追跡した「文学の中に生きるサッフォー」なる章と、わが国におけるサッフォーの翻訳を検討した「わが国におけるサッフォー」なる付論があり、いずれも論者の該博な比較文学的知識を示している。ただし、前者はその扱う範囲が英、独、仏、伊、露の諸文学を覆う広大な領域にわたるため、多少調査の行き届かない点も見られるが、これはいずれ訂正されうる瑕瑾にすぎない。

以上、本論文は、詩人の伝存するほぼ全作品の翻訳と注釈、更に、その生涯と詩的世界の解明により、サッフォーの全体像を初めて明らかにした研究である。この労作が、どれほどの文献学的学殖と長年月にわたる研究、さらには詩人的な感性をも必要とする貴重な成果であるかは、わが国においてはもとより、欧米諸国においてさえ、この種の書物が殆ど出現していない一事をもってしても、明らかであろう。

よって、本論文の提出者は、文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認定する。